

## 田村 光広（たむら・みつひろ）先生

株式会社文化放送 取締役デジタル事業局長

1956年3月19日生まれ。福島県出身。  
1980年3月、上智大学文学部新聞学科卒業。  
1980年4月、(株)ニッポン放送入社。  
2001年6月、同社 編成局長。  
2002年4月、同社退社。  
2002年8月、エイベックス執行役員新規ビジネス部長。  
2004年12月、(株)エフエム東京 デジタルコンテンツ局  
担当局長。  
2006年10月、同社 マルチプレックスジャパン推進室長。  
2007年2月、同社退社。  
2007年6月、(株)文化放送 編成局長兼デジタル事業局長。  
2008年6月、同社 取締役編成局長兼デジタル事業局長。  
2009年6月、同社 取締役デジタル事業局長。



## 〈講義概要〉

株式会社文化放送で、ラジオメディアのデジタル化に最前線で携わる、取締役デジタル事業局長の田村光広氏が、デジタル社会におけるラジオの現状と課題についての講義を行った。

講義では、ラジオ放送の歴史や推移、放送メディアの中でのラジオメディアの現状などを詳細に解説した上で、デジタルラジオの仕組みや予想されるサービスについて具体的に説明。ラジオ業界、ひいては放送業界で起こっている大きな変化を伝えると同時に、ラジオのデジタル化のメリットやその可能性を示した。同時に、ラジオのデジタル化に伴う法体系の整備やシステム作りなどの今後の課題も提示し、まさに変革の真ただ中にあるメディアのあり方について、リアルタイムな視点を与えた。

受講生は、アナログラジオの魅力も再認識しながら、いかに他メディアとの差別化を図り魅力をアピールしていくかが、デジタルラジオの大きな課題であることを確認した。

## 〈受講生の感想〉

インターネットによりラジオとの連携が拡大したというのはとても面白い。あるメディアの分野ひとつだけを調べるのではなく横のつながりをもみることが現代のメディアをみる時に重要なのではないか。これからのテクノロジーの発展により、ラジオというメディアにも様々な新しい可能性を見出すことができるかもしれない。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

テレビが地デジ化することは知っていたけど、そういったデジタル化の何が良く何が課題になっているのか、田村先生のお話はとても分かりやすかったです。デジタルラジオになると動画配信なども出来るようになるようなので、テレビとどういった差別化をはかっていくのかがとても興味深いです。

立命館大学・文学部・3 回生

ラジオのデジタル化は、今までラジオを聞いていなかった層を引き寄せるのではないかと思う。様々な端末から高音質でしかも映像も受信することができ、テレビよりも融通が利くので、移動中はもちろん、生活の間に入ることができるだろう。また BtoB ビジネスになることによっての、新しい展開への期待を感じさせられた。

京都産業大学・経営学部・3 回生

ラジオ低迷のこの世の中、デジタル化は、もっとも適切な活路だと思います。ただ、ラジオ自体の勝手な偏見が現代っ子にはあると思います。いかにしてその偏見を取りはらうくらいまでの魅力をアピールするかが、このコンテンツにおいての一番の課題だと思います。 立命館大学・映像学部・1 回生

ラジオは“聴くもの”という固定されたイメージを私は持っていたのですが、視覚的なものもプラスされていて、以前の「ラジオ」とは全く異なったメディアに、現代のラジオはなっていると感じました。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

もうラジオという僕らが考える枠組みがなくなるのだという印象を受けた。ラジオ＝音という固定概念もなくなる段階になっている。昔から音だけであった世界が動画というものと組み合わせられることでテレビや異なるコンテンツ、それもありきたりなものになってしまうような気もする。時代は確かにそういうものを求めているのかもしれないが、音だけというある意味単純で視覚に頼らないものが与える大きな影響、世界観もある。これからも、デジタルラジオが出世してくる中で、既成のラジオにも頑張ってもらいたい。限られた音の世界が創造的で、僕らの想像力を伸ばしてくれることを期待して。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

